

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十八)

津 守 真

夏 休 み

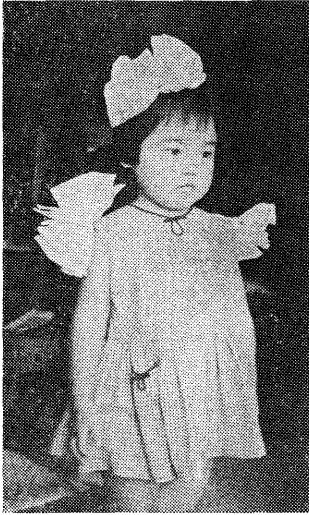
幼稚園や学校にしている子どもにとっては、夏休みには、ふだんとは違った過ごし方をする事ができる時である。きょうだいや家族とゆつくりと親しみ、また、自分自身の興味を持続させて追求することもできる。毎日、きょうだいや家族とだけ過ごすときには、ぶつかりあうことも多いが、一緒に面白く遊ぶ機会も

多くある。具体的なことは、きょうだいの年齢や家族の状況によって異なるが、子どもにとっても親にとっても、幼稚園のあるときでは得られない体験がある。夏休みについては、すでにふれたことがあるが、ここでは五歳児の夏休みの着せかえ遊びの一例について考えたいと思う。

着飾り

8月9日

子どもたちはままごとをしはじめたが、ぶつかり合いが多くて、軌道にのらないように見えた。(ここの子どもたちは、五歳、六歳、三歳の女児である) 私が一緒にはいっても、面白くならない。そのうちに、三歳のYが母親にちり紙でリボンをつけてもらった。それを見て、他の二人の子どもも、ちり紙でリボンをつくり、Yの肩や頭につけることに熱心になりはじめた。(写真1) 私もこれは面白いと思い、私なりに身体に飾りつけるものを



▲ 写真 1

考えて、ベルト、ゆびわ、うでわ、くつなどを紙で作りはじめた。子どもたちもいろいろ作り、互いに飾りつけ、皆、上ぎげんでしずしずと歩いた。

頭や肩にちり紙の花などをつけると、自分が花やいだ気持ちになって、歩き方までかわってくる。私はいろいろ考えて服飾品を作った。そのことは全体を活気づけるのに役立ったのだからと思うが、子どもたちの最大の関心はちり紙のリボンだった。薄いちり紙を扇状に折り、根元でまとめて束ねたちり紙は、ひらひら動いて、指輪や腕輪よりもはなやかな感じを与えたのだから。その同じリボンを、ひとりの子どもは頭につけて飾り、ひとりの子どもは足首につけて靴にする。足をリボンで飾るときには、泥の地面を歩く足ではなくって、ひらひらと動く花びらと同じように舞う足となり、あるいは、ベガサスのように千里を飛ぶ靴となるのだから。実際には歩いていても、気持の上では宙を舞い、空を飛んでいると云ってもよいだろう。頭を花で飾る子どもは、昂然と頭を上げ、はなやかな高揚した気分で王者のようにしずしずと歩む。同じちり紙のリボンをつけるときにも、突差の間に子どもたちの個性があらわれる。そのような個性は、このときだけでなく、長年月にわたって、いろいろの場面でくり返しあらわれるようであ

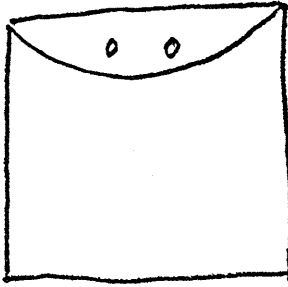
る。

着せかえ

夏休みに入ったとき、市販の紙製着せかえセットを買っておい
た。子どもたちはそれぞれ好きな服を選び、めいめいの箱にいれ
て持っていた。そして毎日のように、それを持ち出して、互いに
しゃべりながら遊び、服や靴の取りかえっこをし、批評し、言い
争いなどしていた。

8月19日

五歳の子どもが折紙に図1のようにかき、



▲ 図 1

「ドンコちゃん」と名
づけた。そして三人で
いろいろの模様を折紙
に描き、洋服と云って
ドンコちゃんにさせて
みる。どれを着せるか
で三人の間で大きわぎ
して選ぶ。そしてまた

新しい服を次々に作る。

「これ ふだんぎじゃないよ」

「なーに？」

「よそゆき」

「これドンコちゃんのおリボンよ」（銀紙を切って、ぼたんと云
っているうちに、リボンになる）

「リボンは、こう横にした方がいんじゃない？」

「ドンコちゃん 太ってるのねー」

「ドンコちゃん、あした幼稚園にいくのよ、幼稚園にいく洋服
作りましょ」

「これふだんぎ？ ふだんぎじゃない？ どっち？」

「これ幼稚園のお誕生会のよ」

「これふだんぎじゃないわねー」（自分で感心してながめる）

「ドンコちゃんの洋服よ、ドンコちゃんておしゃれねー」

「あしたはピクニックなんだからね」

「あ、あたしにピクニック用の洋服作らせてー」

.....

こうしておしゃべりしながら、きせかえの洋服づくりが延々と
つづく。

着る こと

このような子どもの着せかえの洋服づくりを見ていると、子どもは衣服に大きな関心を持っていることがわかる。その衣服への関心の中には、衣服の持つ社会的側面があらわれている。ふだん着とよそゆき、幼稚園にゆく服、お誕生会の服、ピクニック用の服など、用途に応じ、社会的場面に応じて、衣服の種類が違ってくる。しかし、ここで子どもが示している衣服の社会的側面は、固定した社会的要請への適応ではない。むしろ、いろいろの社会的場面に応じて、子ども自身が用意する自分自身の姿と云ってよいであろう。よそゆきには、外出という日常性とは異なった晴れの場面に出るとき、最高の自分自身のイメージをあらわそうとする。幼稚園にゆく服は、仲間の眼に映る自分自身の姿が、心どこかに想定されているであろう。ピクニック用の服には、家族と一緒にお弁当を食べたりするときの明るい楽しさの感情が反映されるだろう。

この日に作ったドンコちゃんの洋服は紛失してしまって、具体的に考察することができないのは残念である。しかし、この頃に作られた多数の衣服の描画をみると、同じよそゆきでも、子どもによってさまざまな描き方をして個性があらわれている。ある子

どもはきれいな花模様を飾り、ある子どもは縦と横の線の格子縞をいくつも作る。またある子どもは水平の波線によって層を分ける。外向きにはなやかに自分自身を統合してゆこうとする子どもも、水平と垂直軸によって基準点を見出そうとしている子ども等々、幼児期の子どもは、しばしば、自らの精神的努力を描画の中にあらわす。自分自身が気に入る図柄や形を見出すまで、子どもはいろいろと試み、探すのである。子どもが衣服に対して関心をもつのは、衣服を通して、自分自身を探究しているのではないかと思われる。

着せかえという幼児の遊びに、衣服の根源的性質を見ることが
できる。

えらぶこと

きせかえの遊びには、多くの洋服の中から、自分の人形にふさわしいものをえらぶという行為がふくまれている。子どもは、多くの可能性の中からどれか一つをえらぶことにより、その人形の個性を作り出すことができる。人は有限の世界に生きているのであって、一つをとり上げ他を捨てることにより、その人の個性が

明確になってゆくのである。衣服をえらぶとき、現実の有限の世界では、人は自分にふさわしいものをえらび、他の可能性を捨てる。子どものきせかえ遊びでは、一度選択したものを容易に変更できるけれども、結局は一つをえらばねばならない、そうでなければ自分の人形の性格をきめることができない。自分の個性にかなうからその衣服をえらぶようになるのであるか、あるいは、その衣服をえらぶことによって個性が作られてゆくのか、このいずれであるのかははっきりとはきめ難い。しかし、一つのものを選択するに至るところにその人の運命があるのであって、そのことがその人の個性を作り上げてゆく。未来の選択は、過去に縛られるのではなく自由に決定されてゆくのであるけれども、一度び選択がなされることによって、個性が明確になってゆくのである。

きせかえ遊びの中で、子どもは自分の人形に合う衣服をえらぶ行為を何度もくり返し、衣服を通して自分の個性を作り上げる試みをしていると云えるのではないだろうか。夏休みの間中、子どもたちは自分のきせかえの衣服の箱を持っていて、取り合ったり、交換したり、貸し合ったりしていた。自分ではない、他人の衣服を着けることは、自分の中に新たな可能性を見出す試みである。それによっても自分の個性に新たな局面が開かれてゆく。実際の衣服の選択においては、デザインやスタイルのみでなく、

材質や価格その他いろいろの要素がはたらいて選択が行なわれるが、きせかえ遊びでは、選択はもっと純粹である。それだけに、個性を発見し作り上げる試みにもっと直接に結びついているのではなかるうか。

ポーちゃん製作

8月20日

五歳の子どもが、大きな包装紙に人形の足を下の方から描きはじめた。一枚では足りなくて、もう一枚、大きな包装紙を出してやった。それに上半身をつなげて描いた。足の先には草履が描かれ、足の部分は縦横の格子縞を密に描いた。洋服の部分も、縦横の格子縞が描かれている。描き終ると、本物のスカートなどいろいろ持ってきてその部分に置いてみたり、ぬいぐるみの動物を持って胸に抱かせたりして感心して眺めている。とても立派な人形だったので、母親が段ボールの厚紙を出してきて、のりで貼るのを手伝った。でき上るとすぐに、六歳の子どもと二人で輪郭をはさみで切り抜いた。それは子どもが肩まで持ち上げても、身長の子

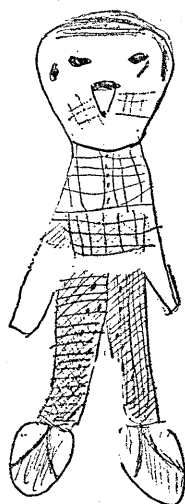
倍以上になる大きな人物だった。(図2)

「あ、ポーちゃんできた」と二人は感激する。

そのあと、一緒にねころごがったり、ねんねんころりをやっあやしたりして遊んだ。下の二人が頭と足をもって歩くと、「そうやるとかえってかわいそうなのよ」と年長の子どもが批判する。

切り抜くこと、自在に動くこと

ポーちゃんは、きせかえの小さな人形と違って、子どもの背丈よりも大きな人形である。それを厚紙で裏打ちして切り抜くと、生きて動くものとして飛び出してくるような印象を与える。その



▲ 図 2

紙は、片面は波型の段になっており、片面は段ボール紙でできた、自在に動く厚紙である。ここで、保育者である母親が、突張った厚紙でなく、この自在に動く段ボール箱に目をつけたことは重要である。子どもは実際にそれを手でかかえて動かしたり、一緒に歩いたり、自分の椅子に坐らせたりできるのであるから、切り抜いた大きな人形は、自分と同じように動く生きた存在として把握されると云ってよいであろう。それだから、ポーちゃんを切り抜いて、背景の紙からそれがとび出してきたときに、子どもたちは感激した。実際にこれから何日も一緒に遊ぶ相手となっただけでなく、この時から十年以上も子どもたちの記憶の中に生き続ける存在となった。

命名すること

この紙製の人物画が切り抜かれた途端に、これがポーちゃんとな付けられた。

固有名詞の名前がつけられるということは、子どもの心の中に生きた人間存在となることだと云ってよいであろう。それは社会的身分を示す呼称でもなく、親族関係を示す呼び名ではない。また実際のきょうだいや友だちの名前でもない。思わず口から出る愛称である。子どもの人形には、しばしばこうした名前がつけら

れる。また可愛がつている猫や動物にも似たような名前がつけられる。そうするとその人形や動物が、新たな存在として、生活の中に仲間入りする。それは子どもの生活の一員として人格をもって生きはじめる。それだから、ポーちゃんの頭と足を持って歩くことに對して、「そうやるとかえってかわいそうなのよ」という抗議も出てくる。

名前のつけられない存在であるうちは、物理的には存在していても、人間の愛情をもって交流する精神的存在としての認識は稀薄であると云えるのではなからうか。もちろん、名前を持たない段階で、抱いたりおぶったり、笑いかけたりすることが素地となっており、その時期の体験は子どもにもおとなにも重要である。

子どもにとつて、その時期の人形、あるいは人物に對する認識は混沌としており、あるときには抱きかかえて可愛がり、あるときには、放り投げて踏みつけ、子ども自身の愛憎さまざま感情がそのままに投影される。その人形が固有名詞をもって呼ばれるようになったとき、子ども自身の精神界の中で、人形は意味連関をもって把握されるようになったと云えよう。人形はもはやいかようにでも扱える物体ではなく、人形自身の心をもった存在となるのである。

夏休みに、きよだいで熱気をもって、くり返し、着せかえ遊びをし、自分たち自身を着飾り、その後大きな人形のポーちゃんを作ったことは、何週間もきょうだいで過す夏休みだからできたことであるように思う。ひとつずつを取り出せば、とり上げるに足りないように見えるあたりまえの遊びである。しかし、どれも一日だけだったなら生れない遊びであつて、何週間もつづけて遊ばれることによつて成り立っている。幼稚園や学校での生活に多くのエネルギーを費さねばならない時期にはできない家庭での遊びである。

何度も述べたように、きせかえ遊びは単に衣服の嗜好を養う遊びではない。いろいろの社会的場面を予想しながら、自分にびつたり合う自分自身の形を探究する努力である。また、それは現在のことにとどまらず、未来における自分自身の探究に連なっている。そのことは、きせかえの中でも、花嫁衣裳に特別な関心が示されることに直截にあらわれている。ここでは花嫁衣裳がきれいだから興味をもつだけではない。ウェディングドレスや頭飾りを描きながら、いつか自分自身が花嫁になるときの姿を夢みている。そのことは、ここでは示していないが、子どもの会話や行動

から見てとることは容易である。衣服遊びの中で、子どもは現在と未来の自分自身のさまざまな可能性をためし、その中から自分自身にかなう形をえらび、自分の個性を作り上げてゆく試みをしている。^{*注}

衣服の遊びやきせかえ遊びは、ここで終るのではない。これから何年にもわたり、さまざまな形でつづいてゆく。考察すべきことは多くあり、ここでとり上げたことはその一部にすぎない。もっと考察すると面白い課題であると思う。また、ここできせかえ遊びをとり上げたのは、たまたま、ある年のある子どもたちに起ったこととしてとり上げたのであって、夏休みの遊びの一つの例にすぎないことは云うまでもないであろう。

夏休みが終って秋の学期になり、子どもたちが幼稚園に出てきたとき、私共は子どもたちがひとまわり成長したような印象をうけることがしばしばである。それは当然のことである。子どもたちはまとまった生活時間をもって、自分自身の中に沈潜し、あるいは自分の壁をのり越えて、新たな自分となる努力をして来ているのであるから。

(つづく)

注 『子どもにとっての衣服の意味』として、ここで取り上げたのとは別の側面について、私は『子ども学のはじまり』（フレール館、昭和五十四年）の第二部第三章で考察してある。

※

※

※